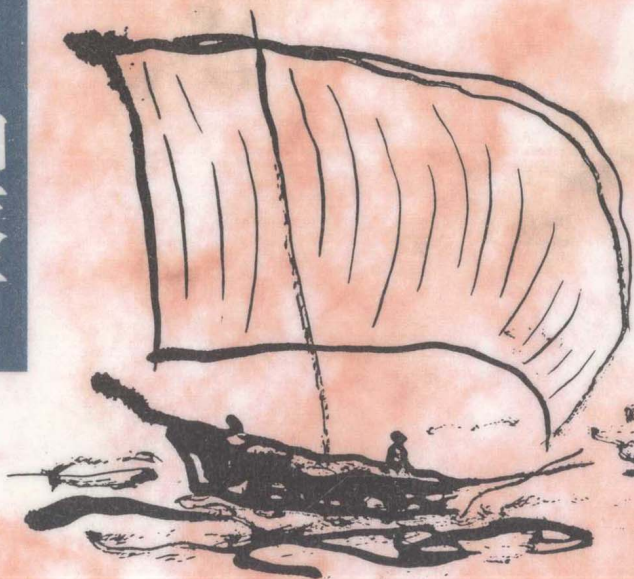


霞が浦

い
い
じ
ま
知
衣
子



霞が浦

一九九六年一月三十一日初版第一刷

著 者 いいじま知衣子

発行者 松崎義行

発行所 新風舎

東京都国分寺市本町二丁目一四

クオークビル四階 郵便番号一八五

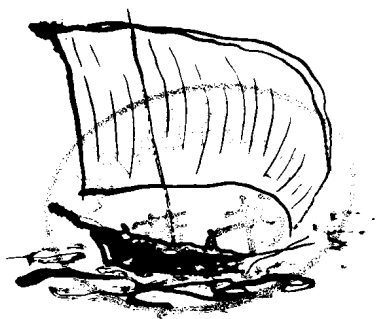
電話 〇四二三二二一八二〇七

振替 〇〇一〇〇四一五七七九三八

定 価 一 一 〇 〇 円 (本 体 価 格 一 〇 六 八 円)

©Chitko Iijima, 1996 Printed in Japan.

霞が浦



いじま知衣子

宇宙の岸辺にて

夏の終わる 夜の浜を
銀河にむかつて 歩けば

こうして

肩をよせあう

喜びにどこまでも波の音がゆく

あゝ熱い肌のたしかな手ごたえに

目をとじれば

何もいらない

人生は宇宙の岸辺に咲いた

はまなすの花だもの

そういつて

潮風がわらっている

装幀
堀川さゆり

霞が浦

その一

「おーい、風が来たぞー」

誰かの叫ぶ声が堤の方から吹いてくると、呑気な者は縁台にかけて将棋をしたり、律儀な者は畑の手入れをしながらその声を待っていた漁師達は、一斉に浜に向かって駆け出した。舟大工の崇太郎を相手に新しい舟の見積もりを練っていた孝次も、あわてて空を見上げた。

「ほんとだ、いい風だぜ崇さん。そんなじゃこの続きは後にしてちよつくら稼いでくらあ」

霞が浦のわかさぎ漁の帆びき舟は、風がなければ動かない。だから、漁の季節になると、漁師達は思い思いの時を過ぎてあなたまかせの風を待っている。一見のどかで厳しい暮らしを強いられていた。昨日も一昨日も思ったような風が出なかったのに、今日

はまもなく夕刻になる頃になってすばらしい風が吹いてきた。

小高い土手の上から見渡すと、一陣の風に乗って真つ白い帆を張りきつた幾艘もの帆びき船が出陣してゆくところだった。まだ、傾くには少し早い陽がいくらか衰えを見せて、舟と潮を照らしている風景はいつか絵巻物のなかに見た古代の戦場にも似ている、と崇太郎はいつも思う。霞が浦で湯浴みするように育ち、幾千度となく見慣れた筈であるのに西空を勢いよく朱の刷毛でなぞり上げたような夕映えは、一度として同じ模様を見せたことがなく見飽きるということがない。

湖へ散っていった漁船の後ろから小舟を出して、沖を一周してくるという日課のために崇太郎はゆつくりと浜へ降りていった。母のような湖のそのふところに抱かれて一日を終わるのはいつの頃からか孤独な崇太郎の生活の一部になっていた。

そして、湖上のその安らぎの心地良さのなかに身をゆだねると、最近芽生えたばかりのまだ小さな決心も鈍く消えてゆきそうな気がして崇太郎は遠く離れた高須の陸を見た。つた。

その時刻漢は束ねた髪を強すぎる風からかばいながらひとりで潮を見つめていた。先

刻まで、ふくれた顔をしてぶつぶつと不平を言っていた女中のさとが仕事の合間を盗んで側にいた。昨日から、東京へ嫁いでいる姉の可奈が里帰りをしていて家の内がざわついている。可奈は漢の縁談を持ち込んだのだが、その前に進んでいた別の縁組があつたために、話がややこしくなっているのだつた。

五里四方に並ぶ門構えはない、と謳われた豪農の高須家の次女娘の漢は評判の器量よして年頃を待たずにあちこちから縁組の申し入れが後を絶たなかったのだが、格式の高い家でありながら後妻の腹であつたためにほどよい調整がとれず十八を過ぎてもなかなかまとまらないでいた。姉の可奈は大家の出であつた母方の祖父の後ろ盾を背に東京の豪商に良縁を得て嫁ぎ栄華を誇っていたが、すでに父も他界してしまつた漢にはそのようなつては望めるべくもなかったから、確かに可奈の親類筋から持ち込まれたこの度の縁談はそれまでのものとは比べるもない家人を迷わす華やかさに満ちていた。

しかし、今朝の食卓で可奈に問い詰められても漢は返事ができなかった。

「まあ、そう急ぐな」

兄の栄作に窘められると可奈はとさかを弾かれた雌鳥のようにたちまち機嫌を損ねた。「急くなつて言うけど相手の方は急いでいるのよ。先方様は見るも聞くもなく私の妹な

らは是非についておっしゃってくださいているのに一体どこが不足なんです。陸軍大学を首席で大臣から軍刀を拝謁して卒業なさったほどの秀才で、ご実家もご立派で、私は主人からも早くこの縁談を持ち帰り喜ばせてやるようにって急かされて飛んできたというのに」

「ほんとうに有り難いこと、漢にはもったいないお話で……」

母のよし乃は後妻の遠慮からいつも先妻の子供である可奈には下手に出たが、先年父が他界して事実上高須本家の当主に納まった兄の栄作は若さに負けぬ分別の持ち主で妹を押さえる力量があった。

「漢は間もなく向こう地の間宮家の息子と見合いをする段取りになっているんだぞ。いまさら断って、間に入っている苑城寺の住職の顔を潰すわけにはいくまい」

苑城寺は栄作と可奈の母が亡くなった後に後妻に入って漢と弟の洋平を生んだよし乃の実家である。隣村にある苑城寺は、村人達からは尊敬されていたが最初の婦人の生家とは比するべくもなく妻女も裁縫所を開いて生計を助けているほど格式の低い貧しい寺であったので、縁談となると、双方の母の違いは、まるで姉妹の身分の違いでもあるかのように如実に示されるのであった。

「向こう地の間宮家ってどれほどの相手なの。私の嫁ぎ先にも恥ずかしくて言えないような家なのではないでしょうね」

（相変わらず、なんて横柄なひとだろう。嫁に行ってもちつとも変わらない）

勝手口で家人のやりとりに聞き耳をたてていたさとは腹に据えかねて思った。

可奈は昔から奉公人などには取り付く島もないような権高な娘だったが、漢は誰にでも隔てがなかったばかりでなく、連れ立って歩くと、道ゆく人をふりかえらせるほど美しく、誰が見ても勝負にならないくらいで勝っているのに……それに、可奈のためには仕付けを取り切れぬような嫁入り仕度を整えながら、腹をいためた漢に対してはなにかと手控えなよし乃のやり方にも羨びいきのさとは納得がゆかないことだった。それが後妻の遠慮というものなのだろうか。

「口が過ぎるぞ可奈」榮作に一喝されて可奈は不機嫌にぷいと席を立った。

「なんて奴だ」

「でも、可奈さんは漢のためによかれと骨を折ってくれているのですから」

よし乃がおろおろと気を遣い、続けて榮作が苦々しく席を立ち、とぎれた話の成り行きをさが自分のことのように憤慨してくれたのだが、漢はどうしても他人のこ

うにしか感じる事ができなくてたよりのない心のままに湖を見つめていたのだ。

「あれは崇さんの舟でねえか」とさつきさが指差した彼方に、わかさぎ漁の帆びき船が幾艘もきらめく波の上でゆれていた。その満杯の白帆の間に、さっぱ舟が一艘まるで笹の葉の様に浮かんでいる。思えば、この時刻にこの丘に立つとそのさっぱ舟は、いつもその沖にあった。遠目を凝らして見ると、舟のなかに小さく見える人影は幼馴染みの崇太郎にみえる。そしてその先には、土地の人々が向こう地とよんでいる木原の岸が霞んでみえる。この湖を真っ直ぐに歩いたら、あの向こう地まで一体何里あるのだろうと、漢はいまだに行つたことのない岸を見つめながらぼんやりと思つた。

夕日はもう半刻ほどで沈む気配を見せ始めた。いま、湖面を散りばめている夕焼けが、少しずつ色を落として、夕暮れをより深く沈めてゆく。輪郭のぼんやりとし始めた崇太郎のさっぱ舟を眺めながら嫁ぐ覚悟をしなければならい、と漢は自ら言い聞かせた。どちらの縁組とて、兄がよかれと信じて勧めてくれたことに違いはなかった。一昨年、急の病に冒されて父が早死にしてから、二十歳半ばで家督を継いだ自分自身もまだ身を固めていないのに、自身をさて置き、弟妹の立場に心を砕く榮作は律儀で心優しい兄であつた。その兄が愛情をもつて取り組んでくれる縁組に異存のあらうはずがなかった。

漢はまだ恋を知らなかった。

その二

「そんなに気にやむなって、先生も言ってくれたじゃないの。ふみちゃん、誰にだって間違いはあるもの、元気だして、あんたのせいじゃないってあれほど言われたのに」

互いの家の分かれ道へ来るまで、うなだれつづけたままのふみを慰めどうしだったきみは、やや持て余しぎみに最後の励ましを言ってくれたが、ふみは沈んだままだった。

この辺りの中農や、気のきいた漁師の娘達がそうするように、ふたりは隣村の苑城寺へ裁縫の手習いに通っていた。すでにふたりはかなり熟練した縫い娘になっていて、とりわけふみは手筋がよかったから今日も高価な反物の裁断を任された。それが今日に限ってどう手元が狂ったか、取り返しのつかない間違いをしてしまったのである。「あつ」と周囲が息をのんだとき、ふみの手にした裁ち鋏はざっくりと布を切り落としていた。真っ青になったふみが取り落とした鋏の下で、美しい紋様をほどこした手書き友禅が一

枚没になった。

お師匠さんは、弟子に任せた自分の安易さを責めて、かえって氣遣つて氣を引き立ててくれたが、ふみの落ち込み方は尋常ではなかった。

そして、それから次の日とその次の日、ふみは裁縫はやすんだ。一日中ぼんやりとして、氣力のない娘をわけのわからないまま案じていた両親は、心配して訪れた苑城寺の妻の説明にやっと納得がいつて恐縮したが、しおれたふみの氣を引き立てることはできなかった。

（苑城寺のおつ師匠さんには申しわけないけれども明日もお稽古にゆく氣になれない）

と重い気持ちで、庭に出ようと履物に足をかけた途端、いきなりふみの耳に父親の盛松の罵声が飛びこんできた。丸二日ほど無断で家を空けて帰宅した兄の修司を怒鳴っている声だった。くどくど並べているなかから「崇太郎を見習え」という言葉が聞こえた。近づくのをためらつて暫くたたずんでいると、ふてくされた顔をした修司がぐぐり戸を開けて入つて来た。習いごとにもゆかず所在なげな妹の姿を見て少し不審な表情をしたが説教が足りぬらしく後に続いてきた父から逃げるように奥に入ってしまった。

その日の夕食の後、ぼんやりとしていると修司がふみの部屋をのぞきこんだ。